

日本語の sluicing 文に関する統語分析

前田, 雅子
九州大学人文科学府

松本, 知子
九州大学人文科学府

<https://doi.org/10.15017/24561>

出版情報 : 九大英文学. 53, pp.117-138, 2011-03-31. 九州大学大学院英語学・英文学研究会
バージョン :
権利関係 :

日本語の sluicing 文に関する統語分析*

前田 雅子・松本 知子

1. はじめに

本稿では、日本語のsluicing(間接疑問文縮約)文についての統語分析を行い、新しい提案を試みる。Sluicing文とは、(1)に示すように、疑問詞「何を」と補文標識「か」しか現れていないにも関わらず「何をメアリーが買ったか」という文解釈ができる文である。¹

(1) メアリーが何かを買ったらしいが、僕は [何をか] わからない。

(Takahashi 1994)

このようなsluicing文は、日本語や英語をはじめとして多くの言語にみられるものであり、(2)から(7)に示すような興味深い特性を持つ。²

まず、(2)に示すようにsluicingの残留要素は主格の「が」を伴うことができない。³ 話者によっては、(1)のように目的格の「を」を伴うsluicingの容認度も下がると言われているが、ここでは目的格や後置詞が残留要素につくsluicingは容認できると考えて議論する。

(2) みんなは [誰かがメアリーを愛していると] 言ったが、

僕は [誰(*が)か] わからない。

(竹沢・Whitman 1998)

次に、(3)に示すように日本語のsluicing文は随意的にcopula「だ」を含むことができる。

- (3) ジョンが誰かから手紙を受け取ったが、
僕は [誰から(だ)か] わからない。 (Saito 2003)

また、(4)に示すように複数の残留要素がある multiple sluicing も存在する。興味深いことに、日本語の multiple sluicing は(4b)に示すように 3 つ以上の残留要素があっても容認可能である。

- (4) a. メアリーが [誰かが何かを買ったと] 言ったが、ジョンは [誰が何をか] 覚えていない。
b. [誰かが何かを買った] そうだが、僕は [誰が何をいつどこでか] わからない。 (Takahashi 1994)

さらに、sluicing 文は sloppy 解釈を許す。例えば、(5)の文において sluiced clause の省略部分に含まれる「自分」は、先行節内の「自分」と同様にジョンを先行詞に取る解釈、つまり、「メアリーはなぜジョンが叱られたかわかっている」という strict 解釈をとることもできるが、省略部分に含まれる「自分」がメアリーを指す解釈、すなわち、「メアリーはなぜ自分自身が叱られたかわかっている」という sloppy 解釈をとることもできる。

- (5) ジョンは [自分がなぜ叱られたか] わかっていないが、メアリーは [なぜか] わかっている。 (Takahashi 1994)

このように strict 解釈だけでなく sloppy 解釈もできる点は、(6)の英語における VP 削除の解釈と同様である。sloppy 解釈は、削除が適用される構文に共通して見られる現象であることから、sluicing にも削除が適用されていると考えられる。

- (6) John loves his mother, and Bill does, too.
a. Bill loves John's mother. (strict 解釈)
b. Bill_i loves his_i mother. (sloppy 解釈)

最後に、日本語のsluicing文は英語のsluicing文とは異なり、島の効果を示す。ただし、島の効果が出るのは(7a)のように残留要素に格助詞が付く場合のみであり、(7b)のように格助詞が付かない場合は島の効果を示さない。

(7) ジョンが 弟に [[何かを贈った] 人] を紹介したらしいが、

a. *私は [何を(だ)か] 知らない。

b. 私は [何(だ)か] 知らない。

(Manabe 2004)

このような特徴に対し、三原・平岩 (2006)やSaito (2003)は、(7b)のように格がない文は「AはBだ」というcopula文であると分析し、copula文は移動を含まないため島の効果が出ないと主張している。本稿でもこの主張に従い、残留要素に格助詞がつかないsluicing文は、copula文である「ジョンが弟に何かを贈った人を紹介したらしいが、私はそれが何(だ)かわからない」を基底構造とすると仮定する。以下では格助詞をともなうsluicing文を考察していく。

以上のような特徴を持つ日本語のsluicing文について、本稿では、Nishiyama et al. (1996)やSaito (2003)をはじめとして広く仮定されている、sluicing文は分裂文から派生されるという分析の経験的問題点を明らかにするとともに、代案として、かき混ぜとCP削除により派生される分析を提案し、その妥当性を示す。本稿の構成は以下の通りである。まず、2節でLFコピー分析、TP削除分析を概観し、それらの分析に見られる問題点がcleft分析で解決できることを示す。次に、3節でKimura and Takahashi (to appear)のin situ分析を概観するとともにその問題点を指摘し、sluicing文は「のだ」文に長距離かき混ぜ操作とCPの構成素削除を適用して派生されると主張する。4節では、cleft分析の経験的問題点を指摘し、それらが本稿の分析により適切に説明できることを示す。5節で論をまとめる。

2. 先行研究

2.1 LF コピー分析

Sluicingの分析には、LFコピー分析と削除分析がある。LFコピー分析は、(8b)に示すように、wh句がTP内の項位置から移動するのではなく、CP指定部

に基底生成し、TPはovert syntaxでは空になっていると仮定する。そして、この空のTPにLFで先行節のTPをコピーすることで、wh句の意味解釈が適切に行われる(Chung et al. (1995)参照)。⁴

(8) a. メアリーが何かを買ったらしいが、僕は [何をか] わからない。

b. [CP 何を [TP

↑
メアリーが買った

この分析は、wh句の移動を仮定しないため、英語のsluicing文において島の効果が消失することをうまく捉えられるという利点はあるが、以下に示す2つの問題点がある (Merchant (2001))。まず、wh句が省略部の動詞と格一致することが挙げられる。wh句がTP内に生起し、CP指定部へと移動すると仮定するならば、wh句は overt syntaxで格を付与されるため、動詞との格一致を自然に説明することができるが、LFコピー分析では、wh句がCP指定部に基底生成するため、この格一致のための余分なメカニズムが必要となる。次に、wh移動の際に前置詞残留を許すか許さないかが、残留要素が前置詞を伴うか伴わないかと一致することが挙げられる。すなわち、wh移動の際、前置詞の随伴が起こらなければならない言語では、残留要素にも必ず前置詞がつかなければならない。これは、sluicing文に移動制約が関わっていることを示す現象であり、wh句がCP指定部に基底生成すると仮定するLFコピー分析では説明しがたい現象である。LFコピー分析にはこのような問題点があるため、本稿では削除分析を支持する。

2.2 TP 削除分析

Takahashi (1994)は日本語のsluicing文を削除により分析し、(9a)に示すように、英語同様、日本語のsluicing文でもCPの指定部へ顕在的なwh移動が起こり、その後(9b)に示すようにTPの削除が行われると主張した。

(9) メアリーが何かを買ったらしいが、僕は [何をか] わからない。

- a. $[_{CP}[_{\text{何を}}]_i \text{ } [_{TP} \text{メアリーが } t_i \text{ 買った}] \text{か}]$ わからない。
 b. $[_{CP}[_{\text{何を}}]_i \text{ } [_{TP} \text{メアリーが } \text{---} t_i \text{ 買った}] \text{か}]$ わからない。

この分析では、先述のLFコピー分析で問題となった現象を説明できる。まず、wh移動があると仮定するため、wh句と動詞の格が一致することや、後置詞を随伴することが説明できる。

しかし、この分析にも3つの問題点がある。1点目に、(10)に示すように、TP削除する前の構造に「だ」を入れると容認できないため、日本語のsluicing文において随意的に「だ」が生起することを説明できない。

(10) * $[_{CP}[_{\text{何を}}]_i \text{ } [_{TP} \text{メアリーが } t_i \text{ 買った}] \text{だか}]$ わからない。

2点目に、(11)に示すように、日本語には顕在的なwh移動がないにも関わらず、sluicing文では義務的にwh移動すると仮定しなければならない。

(11) メアリーは何を買いましたか？

そして、3点目に、wh移動を仮定するため、(12)に示すようなwh句でない残留要素を含むsluicing文も容認可能であることを説明できない。⁵

(12) メアリーは [自分が [かわいいから] もてると] 思っているが、スーは [[賢いから] と] 思っている。
 (Takahashi 1994)

以上のような問題点から、Takahashi (1994)のwh移動とTP削除によるsluicing分析は支持できない。

2.3 Cleft 分析

前節のwh移動とTP削除による分析の問題点を踏まえ、現在では(13a)のようなsluicing文は(13b)の分裂文から派生されるとするcleft分析が広く提案され

ている。⁶

- (13) a. メアリーが何かを買ったらしいが、僕は [何を_iか] わからない。
b. 僕は [_{CP}Op_i [_{TP}メアリーが _{t_i} 買った] の] が 何を_iか] わからない。

Cleft分析では、焦点要素は焦点位置に基底生成し、CP内の項位置に生起する null operatorがCP指定部まで移動して焦点要素と同一指標を付与されると仮定されている (Kizu (2005), Saito (2003)参照)。この分析では、(13b)のように主語CPを省略し、「何を_iか」という焦点要素のみを残すことにより(13a)の sluicing文が派生されると考える。この焦点要素がsluicingの残留要素となる。

この分析は分裂文が(2)から(7)に示したsluicing文の特徴と同じ特徴を示すことから支持されている。まず、分裂文において焦点要素は主格の「が」を伴うことができない。また、随意的にcopula「だ」が生起する。

- (14) [_{CP}Op_i [_{TP}_{t_i} メアリーを愛している] の] はジョン(*が)だ。
(Nishiyama et al. 1996)

- (15) [_{CP}Op_i [_{TP} メアリーが _{t_i} 買った] の] が何を_i(だ)かわからない。

さらに、分裂文では焦点要素が複数現れることができる。

- (16) a. [太郎が_i _{t_j} あげたの] は花子に_i 本を_j(3冊)だ。
b. [太郎が_i _{t_j} 渡したの] は誰に_i 何を_j ですか? (Saito 2003)

Sloppy解釈に関してもcleft分析で説明できる。Saito (2003)は、(17a)がsloppy解釈を持つことから、この例がpro主語の文ではなく、(17b)のように主語DPが削除されて派生された文であることを示した。さらに、この考えを援用し、sluicing文でも同様にCP主語項の削除が行われていると主張した。例えば、(18b)では、「自分が叱られたのが」というCP主語項が削除されている。この仮定のもとではsloppy解釈が出ることを自然に説明できる。

- (17) a. ジョン_iは [自分の提案が採用されると] 思っている。メアリー_jも [採用されると] 思っている。
 b. メアリー_jも [自分_iの提案が 採用されると] 思っている。
- (18) a. ジョン_iは [自分がなぜ叱られたか] わかっていないが、メアリー_jは [なぜか] わかっている。(=(5))
 b. メアリー_jは [_{CP}Op_k [_{TP} 自分_iが t_k 叱られた] の] がなぜ_k (だ)かわかっている。 (Saito 2003)

最後に、(19)に示すように分裂文もsluicing文と同様に島の制約に従う。(19a)は複合名詞句の島であり、(19b)は付加詞の島である。

- (19) a. *[Op_i [花子が [_{island} 太郎が t_i 贈った女性] を探している] の] は 薔薇の花束を_i です。
 b. *[Op_i [[_{island} 太郎が t_i 全部食べたから] 花子が怒った] の] は そのケーキを_i だ。 (長谷川 2006)

以上のように、分裂文とsluicing文が同じ統語的振る舞いをすることからcleft分析は支持されている。しかし、(2)から(7)に示したsluicingの特徴はcleft分析でなくても説明できる。次節では、Kimura and Takahashi (to appear)のin situ分析を概観し、その問題点を指摘するとともに、代案を提示し、上記の特徴を代案で説明できることを示す。

3. 代案

3.1 「のだ」構文 + in situ 分析

代案に移る前に、Kimura and Takahashi (to appear)による興味深い分析を概観する。彼らは、日本語の sluicing 文には随意的に「だ」が現れることに着目し、Hiraiwa and Ishihara (2002)に従い、(20a)のような日本語の sluicing 文は(20b)のような「のだ」構文(久野 (1973, 1983))から派生されると主張した。⁷ さらに、wh 句は移動せずに元位置に留まり、「の」に率いられる CP 内の残りの要素が非構成素削除を受けると主張している。⁸ この分析には、後に示

す wh 句に「しか」がつく例を説明できるという利点がある(4.3 節参照)。

- (20) a. メアリーが何かを買ったらしいが、僕は [何をか] わからない。
b. 僕は $[_{CP}[_{TP} [_{CP}[_{TP} \text{メアリーが 何を } _i \text{買った}] \text{の}] \text{の}] \text{の} \text{ (だ)} \text{] か}$ わからない。

しかし、この分析には、特異な削除操作である非構成素削除を仮定しているという理論的問題に加え、以下に示す経験的問題がある。まず、4.1 節で議論するように、(21a)の束縛条件 A 違反は(21b)のように先行詞の wh 句にかき混ぜを適用することにより回避できることが知られている。ここで、(22)の sluicing の例は容認可能である。しかし、in situ 分析のもとでは残留要素である wh 句が移動せず元位置にとどまるため、(22)は(21b)ではなく(21a)と同様の文から派生されることになり、非文となることを誤って予測してしまう。

- (21) a. *花子は [お互い_iの学生が [誰と誰に]_j 会いたがっていると] 言いましたか？
b. [誰と誰に]_j 花子は [お互い_iの学生が _{t_i} 会いたがっていると] 言いましたか？
(Takahashi 2001)
- (22) 花子はある野球選手たち_iにお互い_iの妻が会いたがっているとっていらしいが、[誰と誰に]_j ですか？

さらに、日本語では、(23)に示すように、XP-SIKA や XP-MO が wh 句より上位に生起すると容認度が下がることが知られているが、(24)のような sluicing 文は容認可能である。wh 句が元位置に留まるならば、少なくとも LF では(24)は(23)の語順を保つはずであり、非文となると誤って予測してしまう。

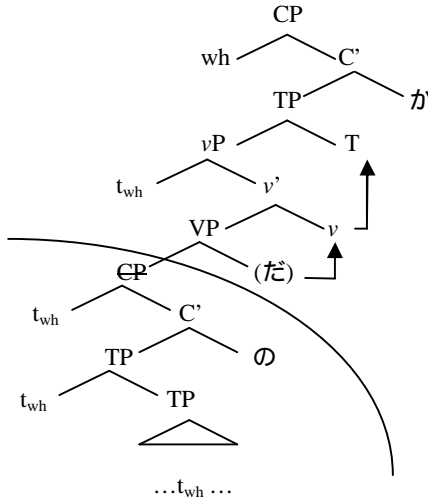
- (23) a. ?*ジョンしか何語がしゃべれないの？ (Takahashi 1990)
b. *ほとんどどの人も何を讀んだの？ (Beck 2006)
- (24) a. ジョンしかある言語を話せないと聞いたけど、僕は何語をか知りたいなあ。
b. ほとんどどの人もある本を讀んだらしいけど、君は何の本をか知ってる？

上記の事実は、sluicing文ではwh句は元位置に留まるのではなくかき混ぜが適用されていることを示している。この事実に基づき、次節では、代案を提示し、上記の特徴を含めたsluicing文の特性を代案で説明できることを示す。

3.2 「のだ」構文 + かき混ぜ分析

本稿では、sluicing文は「のだ」構文に長距離かき混ぜ操作とCPの構成素削除を適用し派生されると主張する。(25)に具体的な派生を示す。

(25) 提案: 長距離かき混ぜ移動 + CP削除



「の」は節を率いる主要部であるため、Saito (2003)に従い、C の主要部位置にあると仮定し、「だ」はcopulaであるため、VP内に基底生成し、v、さらにはTへと主要部移動すると仮定する。また、残留要素はwh移動の適用を受けるのではなく、かき混ぜにより移動されると仮定する。この仮定により、(12)のようなwh句以外の残留要素が残るsluicingも説明できる。具体的には、wh句は「の」を主要部とするCP内から、「か」を主要部とするCPの指定部へと長距離かき混ぜ移動をする。この時、かき混ぜ句は、まず節内でA位置 (TP付加部)へと短距離かき混ぜ移動をする (Takahashi (2001))。その後、phase edgeであるCP指定部、vP指定部を経由して移動し(Chomsky (2001, 2008))、最終的

に、「か」を主要部とするCPの指定部へと移動する。その後CP削除が行われ sluicing文が派生される。⁹

3.3 Sluicing の基本的特性

本節では、3.2 節で提案した分析により 1 節で概観した sluicing の文法的特徴を説明できることを示す。まず、sluicing で「が」格が許されないという特徴に関しては、従属節内で「が」格名詞句にかき混ぜを適用することにより起こる解釈の困難さに起因すると考えられる。例えば、(26a)に示すように、従属節の「が」格名詞句を主節へ移動する文は容認可能であるが、(26b)に示すように、従属節内にかき混ぜ句がある文は容認できない。これは、「何が」よりも「太郎が」のほうが従属節の述部「おかしい」に近いため、「何がおかしいと言っているのか」という正しい読みが、「太郎がおかしいと言っているのか」という誤った読みによって阻害されるためであると考えられる。同様に、(27a)(=2)で示した sluicing の例が非文法的であることも、sluicing の適用を受ける前の(27b)の解釈が正しくできないことによると考えられる。すなわち、「みんなが」のほうが、「誰が」より動詞句に近いため、「誰が、みんながメアリーを愛していると言ったか」という解釈が優勢となり、意図された解釈、「みんなが、誰がメアリーを愛していると言ったか」を阻害してしまうのである。¹⁰

(26) a. 太郎は何かがおかしいと言っているけど、何が太郎はおかしいと言っているの?

b. *太郎は何かがおかしいと言っているけど、僕は何が太郎がおかしいと言っているのかわからない。

(27) a. *みんなは誰かがメアリーを愛していると言ったが、僕は誰がかわからない。(=2)

b. *みんなは誰かがメアリーを愛しているといったが、僕は誰がみんながメアリーを愛していると言ったかわからない。

次に、sluicingで(28)のように「だ」が出現可能であるのは、3.1節で述べたように、従属節が「のだ」構文であるためと考えられる。

(28) メアリーが何かを買ったらしいけど、

僕は $[_{CP}$ 何を_i $[[[_{TP}$ メアリーが t_i 買った] の](だ)] か] わからない。

また、(29a)のようなmultiple sluicingに関しても、日本語では(29b)のようにmultiple scramblingが可能であるため、multiple scramblingをした後にCP削除を適用すると考えることで説明できる。

(29) a. メアリーが [誰かが何かを買ったと] 言ったが、

ジョンは [誰が何をか] 覚えていない。(=(4a))

b. $[_{CP}$ 誰が_i 何を_j $[_{TP}$ $[_{CP}$ メアリーが t_i t_j 買ったと言った(の)]] か] 覚えていない。

さらに、(30a)のようなsluicingに関しても、本稿の分析はCP削除を含むため、sloppy解釈が可能なのは説明できる。

(30) a. ジョンは [自分がなぜ叱られたか] わかっていないが、

メアリーは [なぜか] わかっている。(=(5))

b. メアリーは $[_{CP}$ なぜ_i $[_{TP}$ $[_{CP}$ 自分が t_i 叱られたの] (だ)] か] わかっている。

最後に、島の制約に関しても、(31b)に示すように、かき混ぜ操作は島の制約に従うため、cleft分析と同様にsluicingが島の制約に従うことは説明できる。例えば、(32a)のようにsluicingが島の制約違反を示すのは、その元となる構造(32b)のかき混ぜ文において島の違反があるためである。

- (31) a. 太郎が [_{island} [花子がテーブルの上に置いた] リンゴ] を食べた。
 b. *テーブルの上に_i 太郎が [_{island} [花子が_{t_i} 置いた] リンゴ] を食べた。
 (Kizu 2005)
- (32) a. *ジョンが弟に [_{island} [何かを贈った] 人] を紹介したらしいが、
 私は [何を(だ)か] 知らない。 (=7a)
 b. *私は[_{CP} 何を_i [_{TP} [_{CP} ジョンが弟に [_{island} [_{t_i} 贈った] 人] を紹介したの] (だ)] か] 知らない。

以上、(26)から(32)に示したように、残留要素の格や「だ」の出現可能性、multiple sluicing、そして、島の効果といったsluicingに関する現象は、cleft分析と同様にかき混ぜ分析でも説明できることを示した。次節では、cleft分析では説明できないsluicingの現象があることを示し、それらの現象が本稿の分析では説明できることから、sluicingはcleft分析ではなくかき混ぜ分析により説明されると主張する。

4. 現象

4.1 Condition A

本節では、cleft分析では説明できない現象があることを示し、sluicingの基底構造は分裂文構造とは考えられないと主張する。まず、照応形の認可に関して考察する。日本語では、(33)に示すように、CP主語内に照応形「お互い」があり、焦点要素がその先行詞となる分裂文は容認できない。これは、焦点要素はCP内の照応形をA束縛する位置にないため、また、先行詞と同一指標を持つnull operatorも照応形をA束縛できないためである。後者に関しては、分裂文のnull operatorはCP指定部へと移動する際A位置を経由しないため、または、Takahashi (2001)で主張されたように、null operatorが全く移動しないためであると考えられる。

- (33) * [_{CP} Op_i [_{TP} 花子がお互い_iの妻が_{t_i} 会いたがっていると言った] の] は
 [杉内と和田に]_i だ。 / [誰と誰に]_i ですか？

これに対し、かき混ぜの適用を受けた句は照応形を束縛できる。まず、(34a,b)の対比が示すように、先行詞「太郎と花子」が短距離かき混ぜの適用を受けると、照応形「お互い」を束縛できるようになる。これは、短距離かき混ぜがA移動である証拠と考えられる。同様に、(35a)の非文法的な文における「誰と誰」が(35b)のように長距離かき混ぜの適用を受けても、照応形を束縛できる。このことから、Takahashi (2001)は、長距離かき混ぜは従属節内でA位置へと一旦短距離かき混ぜ移動をした後、さらに移動すると主張している。本稿でもこの仮定に従い、かき混ぜ句が従属節内でA位置 (TP付加部) へと移動して照応形を束縛し、それから節外へと移動すると考える。

- (34) a. *お互い_iの先生が [太郎と花子を]_i 叱った。
 b. [太郎と花子を]_i お互い_iの先生が叱った。 (Takahashi 2001)
- (35) a. *花子は [お互い_iの学生が [誰と誰に]_i 会いたがっている]と言いましたか?
 b. [誰と誰に]_i 花子は [お互い_iの学生が t_i 会いたがっている]と言いましたか? (Takahashi 2001)

ここで、もし、sluicing文が分裂文から派生されるならば、(33)に対応する(36)のsluicing文も容認できないことが予測される。しかし、(36)は容認可能であるため、このsluicing文は分裂文から派生したのではないと考えられる。むしろ、かき混ぜ句ならば照応形を束縛できるため、(37)に示すかき混ぜ文にCP削除が適用され、(36)が派生されると考えるほうが妥当である。

- (36) 花子はある野球選手たち_iにお互い_iの妻が会いたがっていると言っていたらしいが、[誰と誰に]_i ですか?
 (37) 花子はある野球選手たち_iにお互い_iの妻が会いたがっていると言っていたらしいが、[_{CP} [誰と誰に]_i [_{TP} [_{CP} 花子はお互い_iの妻が t_i 会いたがっていると言っていたの] です] か]?

4.2 束縛代名詞

次に、束縛代名詞について考察する。日本語では、「そいつ」「その人」などの要素は束縛代名詞になることができ、その場合、A位置にある先行詞により束縛されることを必要とする。例えば、(38a)では、束縛代名詞「そいつ」が先行詞「誰」により束縛されるため適格であるが、(38b)では、先行詞「誰」が「そいつ」をc統御できるA位置に生起しておらず、束縛することができないため非文となる。

- (38) a. 花子は [誰_iがそいつ_iの学生に会いたがっていると] 言いましたか？
b. *花子は [そいつ_iの学生が誰_iに会いたがっていると] 言いましたか？
(Takahashi 2001)

束縛代名詞に関しても、分裂文とかき混ぜ文とでは容認性に差が生じる。まず、(39)の分裂文において、「そいつ」や「その人」が束縛代名詞として解釈されるためには、先行詞である「誰」に束縛されることを必要とする。しかし、(39)では束縛代名詞の読みが不可能であるため、分裂文の焦点要素、または、それに対応するnull operatorはCP主語内の束縛代名詞を束縛できないことがわかる。

- (39) a. *[Op_i [花子がそいつ_iにつきかえした] の] は誰_iのプレゼントをですか？
b. *僕は [Op_i [花子が t_i その人_iに欲しいと言った] の] が誰_iの本をかわからない。

次に、かき混ぜに関する例を考察する。まず、(40a)では、束縛代名詞である「そいつ」が、先行詞である「誰」によってA位置からc統御されていないため非文である。それに対し、(40a)の「誰に」に長距離かき混ぜを適用した(40b)は容認可能である。このことは、長距離かき混ぜの適用を受ける句「誰に」がA位置を経由し、その位置から束縛代名詞「そいつ」を束縛すると考えることで説明できる。ここで重要なのは、(39)の分裂文の例は容認できな

いのに対し、(40b)のかき混ぜ文は容認できるということである。

- (40) a. *花子は [そいつ_iの学生が誰_jに会いたがっていると] 言いましたか？
 b. 誰_iに花子は [そいつ_iの学生が t_i 会いたがっていると] 言いましたか？
 (Takahashi 2001)

ここで、sluicingの例について考察する。(41)では「誰」がそれぞれ「そいつ」「その人」を束縛することが可能である。Cleft分析では、このsluicingの例を(39)の分裂文から派生することから、cleft分析はsluicing文の容認性を正しくとらえることができない。それに対し、本稿で提案したかき混ぜ分析では、sluicing文の束縛代名詞に関する容認性を正しく予測できる。かき混ぜ分析の下では(41)のsluicing文は(42)の文から派生されると仮定する。まず、「誰の(プレゼント)を」と「誰の(本)を」が最も埋め込まれた節内から従属節内のA位置に移動し、そこで束縛代名詞を束縛する。それから、上位の節へ長距離かき混ぜ移動する。その後、CP削除が適用されて(41)のsluicing文が派生される。

- (41) a. 花子が誰か_iのプレゼントをそいつ_iにつきかえしたらしいけど、僕は [誰_iの(プレゼント)をか] わからない。
 b. 花子はある作家_iの本をその人_iに欲しいと言ったらしいけど、僕は [誰_iの(本)をか] わからない。
 (42) a. 僕は [CP[誰_iの(プレゼント)を]_j [TP[CP~~花子がそいつ_iに~~つきかえしたの]_t] か] わからない。
 b. 僕は [CP[誰_iの(本)を]_j [TP[CP~~花子はその人_iに~~欲しいと言ったの]_t] か] わからない。

4.3 Wh-MO・Wh-SIKA

最後に、本節では、「何も」「誰にも」などのWh-MOや、「誰にしか」などのWh-SIKAの認可について考察する。(43a)、(44a)に示されるように、Wh-MOとWh-SIKAは否定文にのみ生起する要素であり、否定辞「ない」により認可

される。詳しい認可のメカニズムについてはここでは触れないが、これらの要素は、(43b-d)や(44b)が容認できないことからわかるように、否定辞と同じ節内にあることを必要とする。¹¹

- (43) a. 誰も説明を理解しなかった。
b. *誰も説明を理解した。
c. *花子が [太郎が何も食べた] 言わなかった。
d. *誰も [太郎が来なかった] 言った。 (西岡 2007)
- (44) a. 太郎が [健が花にしか会わなかった] 言った。
b. *太郎が [健が花にしか会った] 言った。

ここで、分裂文について考察する。Kizu (2005)は、焦点要素が Wh-MO/Wh-SIKAであり、否定辞がCP主語内にある分裂文は、否定辞と焦点要素が同一節内にないため容認できないことを示した。以下に同様の例を示す。

- (45) a. ?*次郎は [Op_i [太郎が t_i 次郎の秘密をばらしていない] の] が本当に誰にも_i か疑っていた。
b. *警察は [Op_i [t_i この部屋に入らなかった] の] が誰も_i かどうか疑わしいと言った。
- (46) a. *太郎が [Op_i [健が t_i 会わなかった] 言ったの]は花にしか_iです。
b. *太郎が [Op_i [健が t_i 会わなかった] 言ったの]は誰にしか_iですか？

では、かき混ぜにより要素を否定文の外へ移動する場合はどうであろうか。まず、(47a)は「誰にも」が否定文に生起しているため、容認可能である。ここで、Wh-MOの要素は、否定辞と同一節内にあることにより認可されることから、(47b)のように「誰にも」に節を超えて長距離かき混ぜを適用すると容認不可能となることが予測されるかもしれない。しかし、実際は容認可能である。これは、Saito (1989)で主張されたように、かき混ぜ句はLFで再構築す

る、すなわち、かき混ぜ句は元位置で解釈されるためと考えられる。Kato (1994)も、否定対極表現「しか」の例を根拠に、同様の主張を行っている。

(47) a. 太郎は [誰にも次郎の秘密をばらしていないと] 言った。

b. 誰にも_i 太郎は [t_i 次郎の秘密をばらしていないと] 言った。

(48) a. ジョンが[[メアリーが英語しか勉強しない]と]思っている。

(Kato 1994)

b. 英語しか_i [[ジョンがメアリーが t_i 勉強しない]と]思っている。(ibid.)

c. 誰にしか_i [[健は t_i 会わなかった]か]教えて下さい。

(49) Scrambling can be freely undone at LF. (Saito 1989, Kato 1994)

ここで、もしsluicing文が分裂文の構造をもとに派生されるならば、(45)の分裂文に対応する(50)のsluicing文や、Wh-SIKAを含む(51b)のsluicing文は容認できないことが予測される。しかし、実際は容認可能である。従って、sluicing文は分裂文から派生されるとは考えられない。むしろ、(50)、(51b)の容認可能なsluicing文は、それに対応し、かつ容認可能な構造をとるかき混ぜ文(52)、(53b)から派生されると考える方が妥当である。¹²

(50) a. 太郎は誰にも次郎の秘密をばらしていないと言ったが、次郎は [本当に誰にもか] 疑っていた。

b. 隣人は誰もこの部屋に入らなかったと言ったが、警察は [誰もかどうか] 疑わしいと言った。

(51) a. 健は一人の女の子にしか会わなかったそうだ。

b. 誰にしかか教えてください。(Kimura and Takahashi (to appear))

(52) a. 次郎は [CP 本当に誰にも_i [TP t_{CP} 太郎が t_i 次郎の秘密をばらしていないの]] か]疑っていた。

b. 警察は [CP 誰も_i [TP t_{CP} t_i この部屋に入らなかったの]] か]どうか] 疑わしいと言った。

(53) a. 健は一人の女の子にしか会わなかったそうだ。

b. [_{CP} 誰にしか_i [_{TP} _{CP} 健は _i 会わなかったの]] が教えてください。

以上、sluicing文は、照応形、束縛代名詞、Wh-MOとWh-SIKAに関して、分裂文ではなくかき混ぜ文と同じ容認性を示すことを明らかにし、cleft分析よりもかき混ぜ分析の方がsluicingの特性をより包括的に説明できると主張した。

5. 結論

本稿では、日本語の sluicing 文に対して一般に支持されている cleft 分析とは異なる新しい提案を行い、その分析の妥当性を論じた。具体的には、照応形や束縛代名詞の束縛、そして Wh-MO と Wh-SIKA の認可に関する現象から、日本語の sluicing 文が分裂文とは異なる統語的振る舞いをすることを示し、sluicing 文が分裂文と CP 削除から派生されるのではないということを経験的に示した。そして、日本語の sluicing 文は「のだ」構文に長距離かき混ぜ操作と CP の構成素削除が適用され派生されるという本稿の分析により、sluicing 文の基本的な特徴だけでなく、cleft 分析や「のだ」構文 + in situ 分析では説明できない現象も説明できることを論じた。

註

* 本稿は The English Linguistic Society of Japan 3rd International Spring Forum(2010年4月、於：青山学院大学)において口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。本稿の作成にあたっては、西岡宣明先生と稲田俊明先生から示唆に富むたいへん貴重なご指摘やコメントを頂戴した。また、高橋大厚先生にも有意義なコメントを頂いた。特記して感謝の意を表したい。言うまでもなく、本稿の内容や例文に関する不備はすべて筆者達の責任である。

1. Sluicing を最初に詳細に分析した論文は Ross (1969)であり、そこで sluicing とは wh

句だけを残して先行節にある要素と同じ要素を削除する規則として提示した。

2. Sluicing 文はドイツ語、ギリシア語、中国語、ハンガリー語、ヒンディー語、トルコ語など多くの言語に見られる。Merchant (2001, 2008)参照。
3. 残留要素が主格表示されている例を容認する話者もいる。
4. Chung et al. (1995)の分析の批判的論考として Merchant (2001)、Fox and Lasnik (2003)が挙げられる。
5. (12)のような残留要素が wh 句ではない構造は一般に stripping と呼ばれる。しかし、本稿では Fukaya and Hoji (1999)による stripping は sluicing の一種であるという仮定に従い、統一的に sluicing と呼ぶ。
6. Cleft 分析を支持した論考として、長谷川 (2006)、Kizu (2005)、Kuwabara (1997)、Manabe (2004)、Merchant (1998)、Nishiyama et al. (1996)、Saito (2003)等を参照。
7. Hiraiwa and Ishihara (2002)は Rizzi (1997)の階層化された CP 構造を仮定し、日本語の sluicing 文では残留要素である wh 句が「だ」を主要部に持つ FocP の指定部へ、「の」を主要部に持つ FinP が TopP の指定部へ移動し、TopP の削除が起こると主張した。しかし、「の」が Fin の主要部であり、「だ」が Foc の主要部であるとする根拠は希薄であり、Kimura and Takahashi (to appear)が主張するように「だ」は copula であると考えたほうが自然であることや、日本語の sluicing 文は弱交差を引き起こさない、照応形を認可するといった A 束縛に関する特性を持つため、sluicing 文が A 移動である焦点化移動から派生されるとは考えられない。したがって、本論では Hiraiwa and Ishihara (2002)の主張を支持しない。
8. in situ 分析として、他に Abe (2008)が挙げられる。
9. ここで仮定した長距離かき混ぜに関して、Miyagawa (2006)は長距離かき混ぜは焦点化移動であると主張した。この考えのもとでは、sluicing 文が焦点要素を残し他の部分を省略することで、その要素を強調して伝える文であるということも統語的に説明できる。
10. 削除にはある種の違反を修正することができると言われていたが、(26)-(27)のような文解析上の問題や、(32b)のような島の制約の違反がなぜ修正されないのかという問題が高橋大厚先生により指摘された。
11. Kato (1994)は、Wh-MO は同一節内の否定辞が c 統御することにより認可されると主張する。また、西岡 (2007)は、Wh-MO の認可に関し、()を仮定する。この仮

定の下では、否定辞と Agree することで Wh-MO が認可される。さらに、否定辞が持つ EPP 素性により、Wh-MO は NegP の指定部へと移動する。

() a. Wh-MO は、解釈可能な[+NEG]素性と解釈不可能な[uneg]素性を持つ。

b. Negative Concord を許す Neg 主要部は、随意的に解釈不可能な[uNEG]素性と EPP 素性を持つ。

12. Kimura and Takahashi (to appear)の in situ 分析では、(51b)の文法性は wh 句が sluicing 文では移動しないために否定辞と同じ節内に wh 句が留まることによると考えられる。

参考文献

- Abe, Jun (2008) "Embedded Sluicing in Japanese," in *Pragmatic Functions and Syntactic Theory: In View of Japanese Main Clauses: A Report for Grants-in-Aid for Scientific Research*, 121-174, Kanda University of International Studies.
- Beck, Sigrid (2006) "Intervention Effects Follow from Focus Interpretation," *Natural Language Semantics* 14, 1-56.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chung, Sandra, William Ladusaw, and James McCloskey (1995) "Sluicing and Logical Form," *Natural Language Semantics* 3, 239-282.
- Fox, Danny and Howard Lasnik (2003) "Successive Cyclic Movement and Island Repair: The Difference between Sluicing and VP Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 34, 143-154.
- Fukaya, Teruhiko and Hajime Hoji (1999) "Stripping and Sluicing in Japanese and Some Implications," *WCCFL* 18, 145-158.
- 長谷川信子 (2006) "Sluicing and Truncated Wh-Questions" 『言語科学の真髄を求めて—中島平三教授還暦記念論文集—』鈴木右文, 水野佳三, 高見健一編, 453-470, ひつじ書房, 東京.

- Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara (2002) "Missing Links: Cleft, Sluicing, and "No *da*" Construction in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 35-54.
- Kato, Yasuhiko (1994) "Negative Polarity and Movement," *MIT Working Papers in Linguistics* 24, 101-120.
- Kimura, Hiroko and Daiko Takahashi (to appear) "NPI and Predicative Remnants in Japanese Sluicing," *Proceedings of Japanese/Korean Linguistics Conference* 19.
- Kizu, Mika (2005) *Cleft Constructions in Japanese Syntax*, Palgrave Macmillan.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店, 東京.
- 久野暉 (1983) 『新日本文法研究』大修館書店, 東京.
- Kuwabara, Kazuki (1997) "Multiple Wh-Phrases in Elliptical Clauses and Some Aspects of Clefts with Multiple Foci," *MIT Working Papers in Linguistics* 29, 97-116.
- Manabe, Mamoru (2004) "A Note on Island-Sensitivity of Clefts and Sluicing in Japanese," *Linguistic Research* 20, 181-191.
- Merchant, Jason (1998) "Pseudosluicing": Elliptical Clefts in Japanese and English,' *ZAS Working Papers in Linguistics* 10, 88-112.
- Merchant, Jason (2001) *The Syntax of Silence: Sluicing, Islands, and the Theory of Ellipsis*, Oxford University Press, Oxford.
- Merchant, Jason (2008) "Variable Island Repair under Ellipsis," *Topics and Ellipsis*, ed. by Kyle Johnson, Cambridge University Press, Cambridge.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造 ミニマリストプログラムとその応用』松柏社, 東京.
- Miyagawa, Shigeru (2006) "Moving to the Edge," Ms., Massachusetts Institute of Technology.
- 西岡宣明 (2007) 『英語否定文の統語論研究』くろしお出版, 東京.
- Nishiyama, Kunio, John Whitman and Eun-Younh Yi (1996) "Syntactic Movement of Overt Wh-Phrases in Japanese and Korean," *Proceedings of Japanese /Korean Linguistics Conference* 5, 337-351.
- Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer, Dordrecht.
- Ross, John Robert (1969) "Guess who," *Papers from the Fifth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, ed. by Robert I. Binnick, Alice Davidson, George M. Green,

and Jerry L. Morgan, 252-286, Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago.

Saito, Mamoru (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement," *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Saito, Mamoru (2003) "Ellipsis and Pronominal Reference in Japanese Clefts," *Nanzan Linguistics* 1, 21-50.

Takahashi, Daiko (1990) "Negative Polarity, Phrase Structure and the ECP," *English Linguistics* 7, 129-146.

Takahashi, Daiko (1994) "Sluicing in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 3, 265-300.

Takahashi, Daiko (2001) "Scrambling and Empty Categories," *MIT Working Papers in Linguistics* 41, 47-58.

竹沢幸一・John Whitman (1998) 『格と語順と統語構造』 研究社, 東京.